

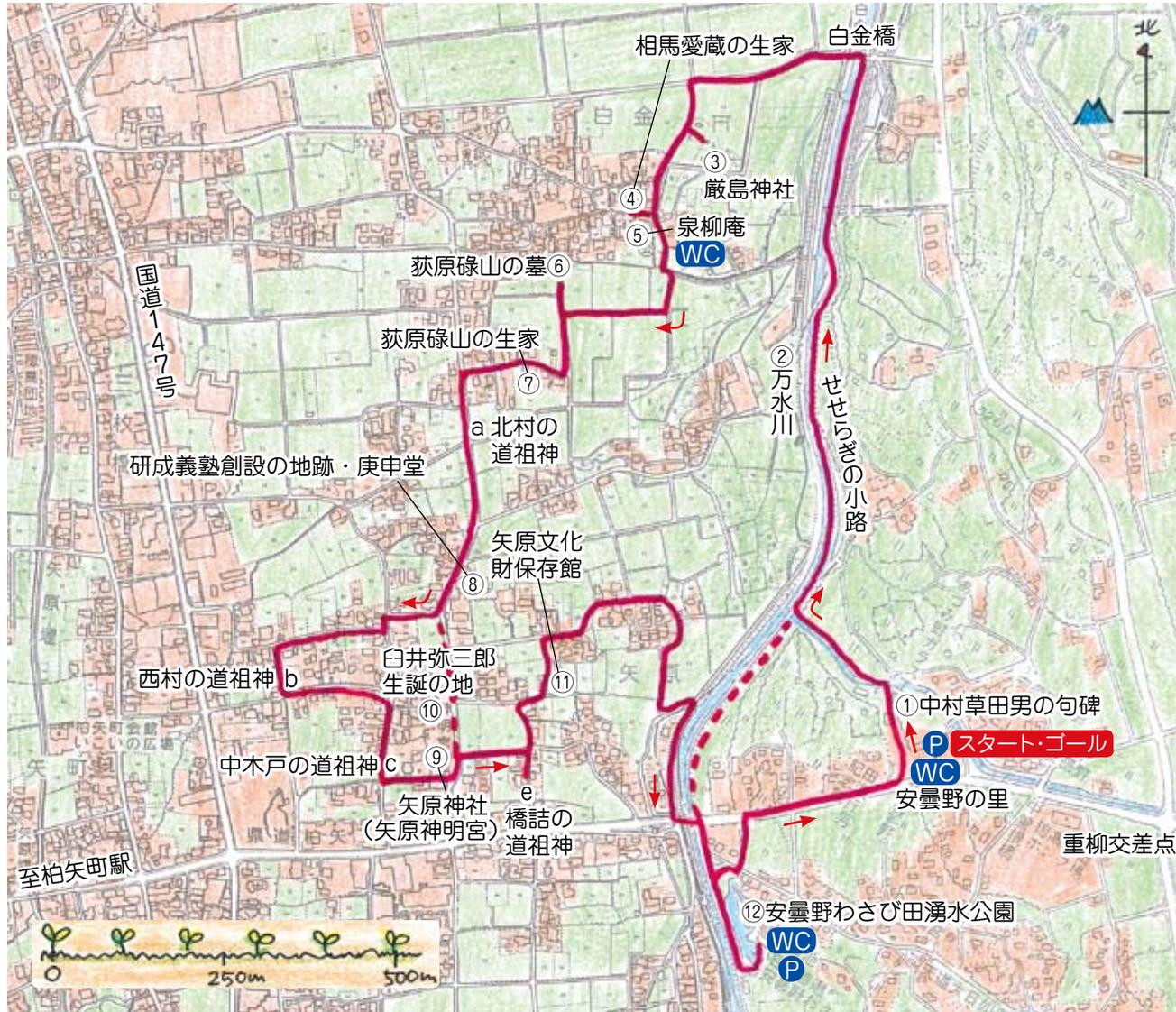
No.1 穂高・白金矢原地区

——道祖神と偉大な歴史を作った先人を訪ねて——

ガラス工房などの施設が集まる「安曇野の里」を起点に、万水川、厳島神社、相馬愛蔵の生家、荻原碌山の墓と生家、湧水公園など、白金地区と矢原地区をめぐるコースです。個性的な8体の双体道祖神や矢原神社（矢原神明宮）・矢原文化財保存館などもあり、安曇野の古代からの歴史や自然の豊かさを感じる見どころがたくさんです。



矢原神社（矢原神明宮）



はしのつめ 橋詰の道祖神

◆コースタイム ※時間は歩速 3km / 毎時としての目安です（休憩含まず）。

スタート 安曇野の里→約 1.7km*35 分→厳島神社→約 0.2km*3 分→相馬愛蔵の生家→約 0.4km*10 分→荻原碌山の生家→約 0.5km*10 分→研成義塾創設の地跡→約 0.8km*15 分→矢原神社(矢原神明宮)→約 1.0km*20 分→湧水公園→約 0.6km*12 分→ゴール 安曇野の里【合計】 約 5.2km*1 時間 45 分



荻原碌山の墓



相馬愛蔵の生家



せせらぎの小路



矢原文化財保存館



安曇野の里

①中村草田男の句碑

「安曇野の里」の敷地内にあり、俳人・中村草田男（1901～83）が安曇野で詠んだ「蜻蛉ゆくうしろ姿の大きさよ」の句が刻まれています。



②万水川

農業用水・拾ヶ堰の排水口である除沢を起点に、犀川に合流するまでの全長7.7キロメートルの一級河川。安曇野の扇状地の湧水を集め、通年枯れることはありません。



③巖島神社

相馬家には河童から家伝の接骨術を伝授されたという伝説が伝わり、その河童を代々の家長がまつたという祠があります。現在は巖島神社としてまつています。



④相馬愛蔵の生家

相馬愛蔵（1870～1954）は良（黒光、1875～1955）を妻に迎え、洋風の新館を建てました（ふだんは非公開）。明治34年（1901）上京してパン屋の中村屋を開業。新宿駅前に進出し、多くの芸術家や文化人が集まる文化サロンができました。



⑤泉柳庵（白金）

川西（南安曇郡）三十四番観世音の第九番に当たる札所ですが、現在は無住です。庭には十余基の馬頭観音があります。



⑥荻原碌山の墓と⑦生家

日本に近代彫刻をもたらした荻原碌山（1879～1910）はこの村に生まれました。禁酒会の同志として相馬家を訪れ、愛蔵・良（黒光）に出会いました。墓の揮毫は画家・中村不折のものです。



⑧研成義塾創設の地跡 ※安曇野市史跡・庚申堂

明治31年（1898）、井口喜源治（1870～1938）はここに私塾「研成義塾」を創設し、キリスト教に基づく教育を始めました。奥の庚申堂には彩色された石像が安置されています。



⑨矢原神社（矢原神明宮）

この一帯は古代、伊勢神宮の荘園・矢原御厨があったところで、社殿の配置も天照大神をまつる神明宮の古い形式を伝えているといわれています。



⑩白井弥三郎生誕の地

矢原地区は、地味は肥沃でしたが水利の便が乏しい土地でした。江戸時代の矢原村の庄屋・白井弥三

郎（1621～90）は農業用水の開発を計画し、死を覚悟の上で松本藩を説得して許可を得、承応2年（1653）遠く犀川から水を引く難工事を完成させました。当初は弥三郎堰と呼ばれましたが、後に矢原堰と改められました。



⑪矢原文化財保存館

矢原周辺の遺跡からは弥生時代～平安時代の集落跡が発掘され、出土した遺物が展示されています。見学は要予約（連絡先：矢原区長）。

⑫安曇野わさび田湧水公園

この辺りは安曇野の扇状地の扇端にあたり、この公園にも毎分70トンの水が湧き出しています。このような湧き水を利用して、一帯にはわさび畑や養殖池が多くあり、この地区の重要な産業となっています。湧水は「安曇野わさび田湧水群」として日本の名水百選に選ばれています。



—— 白金・矢原の道祖神 ——

白金・矢原地区には8基の道祖神がまつられています。江戸時代から明治時代にかけて作られたもので、この地区には文字碑はなくすべてが双体像で、男女が手を取り合った握手像か、盃と瓢を持つ酒器像です。春の道祖神祭りに彩色されるものもあります。

安曇野豆知識 p.26



a 矢原北村の道祖神
酒器像 安政5年(1858年)



b 矢原西村の道祖神
酒器像 元治元年(1864年)



c 矢原中木戸の道祖神
酒器像 明治25年(1892年)

No.2 穂高・等々力地区

—— 水辺の風景と道祖神を訪ねて ——

等々力家を起点に、三角島、早春賦の碑、等々力城跡、道祖神などをめぐるコースです。わさび田やニジマスの養殖池が点在し、安曇野らしい水辺の風景と北アルプスの眺望が楽しめます。また、等々力城跡や数多くの道祖神など歴史と文化を感じる地区です。



等々力城跡



等々力西村の道祖神
(右は大勢至塔、左は庚申塔)



東光寺



北アルプスの眺め



「水色の時」道祖神



水辺の風景



三角島



等々力家の長屋門 (安曇野市有形文化財)

◆コースタイム ※時間は歩速 3km / 毎時としての目安です (休憩含まず)。

スタート 等々力家→約 1.3km*25 分→「水色の時」道祖神公園→約 0.4km*10 分→三角島→約 0.9 km*20 分→早春賦の碑→約 1.1km*20 分→等々力城跡→約 1.1km*20 分→ゴール 等々力家

【合計】約 4.8km*1 時間 35 分



①等々力家 ※長屋門：安曇野市有形文化財

等々力村の庄屋を勤めた家で、松本藩主がこの辺りで狩猟をした際は「御本陣」として休憩所となりました。主屋には殿様座敷があり、長屋門は安曇野市の有形文化財に、庭園のビャクシンは天然記念物に指定されています。

◇開館時間：9：00～16：00 入館料：300円
冬季休業（12月～3月）



②「水色の時」道祖神公園

昭和50年（1975）NHK朝の連続テレビ小説「水色の時」のために、彫刻家・須藤賢氏が制作した道祖神がここに置かれ、道祖神公園となっています。

☞安曇野豆知識 p.26



③三角島

万水川と蓼川に挟まれた三角地です。この自然豊かな場所をよりよい方法で整備をしようという「三角島ふるさとの森プロジェクト」が始まっています。

☞安曇野豆知識 p.25



④わさび田

扇状地の扇端の豊かな湧水を利用して、この一帯には「大王わさび農場」をはじめとした多くのわさび田があります。散策していると大小さまざまなわさび田に出会います。

☞安曇野豆知識 p.24



⑤早春賦の碑

「春は名のみの風の寒さや」で始まる唱歌「早春賦」は、作詞家の吉丸一昌が安曇野の遅い春を待ちわびる思いを歌にしたといわれます。それを記念してこの地に歌碑が建てられ、毎年4月29日には早春賦音楽祭が開かれます。



⑥等々力城跡

戦国時代の武将等々力氏の砦のあった所です。石彫家・大神弘氏がここに灯笼と石像を制作し、史跡として整備されました。常念岳の眺めがすばらしいポイントです。



等々力の道祖神



a 道祖神 酒器像
文政2年（1819年）
女神の持つ酒器は大徳利のようです。



b 道祖神 握手像
天保12年（1841年）
男女の神が肩を組み仲睦まじく手を取り合っています。



c 道祖神 握手像（右端）
明治18年（1885年）
大黒天・二十三夜塔碑と一緒に並んでいます。



d 道祖神握手像
天保10年（1839）
女神は素足のままです。



e 道祖神 握手像
天保2年（1831）
小型の愛らしい道祖神碑です。



f 道祖神 握手像（手前）
文政2年（1819）
東光寺入口の脇に二十三夜塔などとまつられています。

☞安曇野豆知識 p.26

No.3 穂高・小岩岳地区

—— 山麓の城址と天蚕を訪ねて ——

ピフ穂高を起点に穂高山麓の小岩岳城跡、小岩岳集落、天蚕センターをめぐるコースです。高台の展望台からは安曇野が一望でき、小岩岳集落には屋敷林や石垣などの歴史的まちなみが残っています。天蚕センターでは、「繊維のダイヤモンド」と呼ばれる天蚕の歴史や、ヤマコの生態を知ることができます。



小岩岳集落のまちなみ



小岩岳の道祖神



ピフ穂高



安曇野市天蚕センター



天蚕センターの展示室内部



のろし展望台からの眺め



小岩岳城跡



八面大王の足湯

◆コースタイム ※時間は歩速 3km / 毎時としての目安です (休憩含まず)。

スタート ピフ穂高→約 0.4km*8分→八面大王の足湯→約 1.0km*20分→小岩岳城跡→約 0.6km*12分→のろし展望台→約 0.9km*20分→小岩岳の屋敷林→約 1.8km*35分→安曇野市天蚕センター→約 0.7km*15分→ゴール ピフ穂高 【合計】 約 5.4km*1時間 50分

はちめんだいおう
①八面大王の足湯

安曇野に伝わる伝説の八面大王をモチーフとした足湯です。中央には喜怒哀楽を表わした八つの顔を持つモニュメントがあり、冬の夜はイルミネーションに彩られます。



②穂高温泉郷

穂高温泉郷といっても温泉旅館街があるわけではなく、松林の別荘地の中に旅館や保養所などが点在しています。ここから約20分、上流の名湯・中房温泉の湯を引湯し、源泉は約80度、泉質はアルカリ性単純泉です。



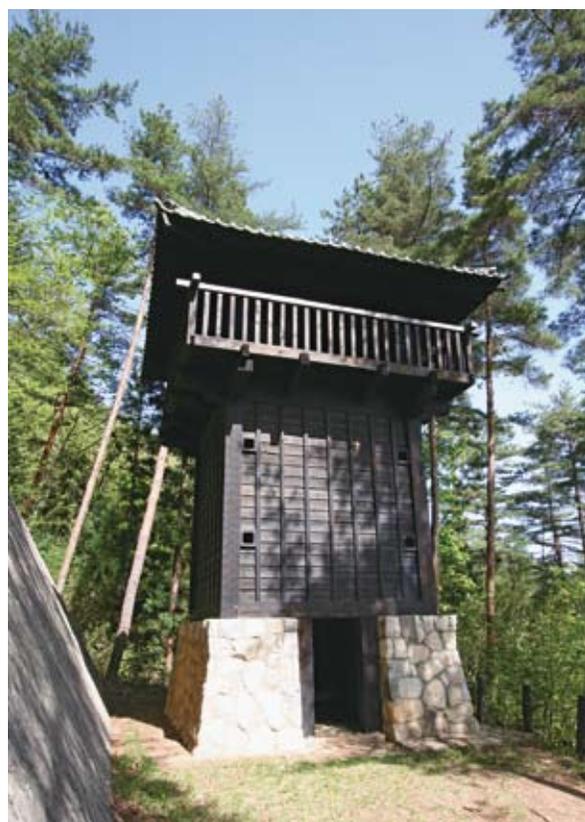
③小岩岳城跡 ※安曇野市史跡

戦国時代の古厩郷の武将・古厩氏の宿城と考えられています。前面に三段の郭を構え、山頂に至る間にいくつかの帯郭や堀切を設け、水源もあり矢竹も自生しています。この城を舞台に武田軍との間で激しい戦いがありました。



④のろし展望台

近年の城址公園の整備に合わせて、砦門やあずま屋とともに造られました。山麓の松林の向こうに、安曇野の田園風景が一望できます。



⑤小岩岳の屋敷林

小岩岳へと続く古い街道沿いの屋敷林です。塀に囲まれた屋敷内には本棟造の主屋や土蔵が建ち並び、歴史的なたたずまいが残っています。

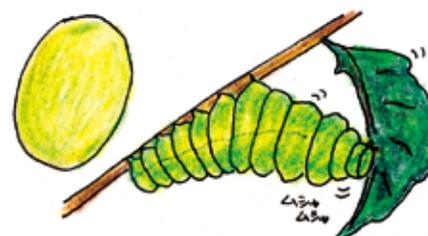


⑥安曇野市天蚕センター

「繊維のダイヤモンド」といわれる天蚕についての資料を集め、ヤマコの卵から繭まで、繰糸から機織りの過程、天蚕織物の製品などを展示しています。作業棟では機織り作業を見学でき、天蚕製品などの販売もしています。

◇開館時間：9:00～17:00（11月～3月は9:00～15:00）入館料：無料 月曜定休

☞安曇野豆知識 p.26



⑦しゃくなげ荘

穂高温泉郷の松林の中にある、昭和48年創業の市営温泉宿泊施設です。外来入浴も可能で、地元の利用客も多く訪れます。隣接して日帰り専用の「温泉健康館・穂高ヘルスハウス」もあります。

◇営業時間：9:30～20:00

入湯料：大人400円・小人200円 年中無休



— 小岩岳の道祖神 —



a 道祖神 握手像

文化7年（1810年）

肩を組み手を握り合い、ぴったりと頬を寄せ合っているほほえましい姿です。庚申塔や二十三夜塔などと一緒に並んでいます。

☞安曇野豆知識 p.26

No.4 豊科・飯田地区

—— 堰と屋敷林を訪ねて ——

信濃教育会生涯学習センター（旧信濃教育会本館）を起点に、拾ヶ堰、飯田砦跡、屋敷林、旧飯野屋などをめぐるコースです。古代から中世の開発の元となった飯田堰、安曇野を代表する疎水である拾ヶ堰や勘左衛門堰など、安曇野の利水の歴史を垣間見ることができます。また、屋敷林や本棟造など歴史的なまちなみも残っています。



飯田砦跡



北アルプスを望む田園



◆コースタイム ※時間は歩速 3km / 毎時としての目安です（休憩含まず）。

スタート 信濃教育会生涯学習センター（旧信濃教育会本館）→約 0.2km*5 分→旧飯田村郷蔵（信州坊主）→約 0.7km*15 分→拾ヶ堰サイフォン→約 1.5km*30 分→飯田砦跡→約 0.4km*10 分→中飯田の屋敷林→約 1.4km*30 分→旧酒蔵「飯野屋」（蔵久）→約 1.1km*20 分→飯田の諏訪神社→約 0.3km*5 分→ゴール 信濃教育会生涯学習センター（旧信濃教育会本館） 【合計】約 5.6km*1 時間 55 分



信濃教育会生涯学習センター（旧信濃教育会本館）



飯田堰と古いまちなみ



本棟造と屋敷林

①信濃教育会生涯学習センター

(旧信濃教育会本館) ※国登録有形文化財

昭和4年(1929)長野市内に信濃教育会の本館として建てられたものを、平成2年(1990)にこの地に移築したものです。現在は生涯学習センターとして利用されており、ゴシック調の内部意匠、黒光りするケヤキ材、昭和の文人らの書など、内部にも見どころがたくさんです。

◇開館時間：9:00～16:00

休館日：土・日曜日 入館料：無料



②西田幾多郎碑 ※安曇野市有形文化財

「西田哲学」と呼ばれる独自の哲学世界を築いた、近代日本の代表的哲学者・西田幾多郎(1870～1945)の詞碑で、「無事於心 無心於事 物となって考へ物となって行ふ」とあります。昭和16年(1941)当時の高家村と高家小学校が西田幾多郎に揮毫を依頼して建てました。



③旧飯田村郷蔵(信州坊主)

江戸時代に村ごとに建てられた郷蔵は、年貢米の集荷や備蓄米の保管などに使われました。明治に入ると旧飯田村ではまず「飯田学校」に、その後は公民館へと転用し、現在は移築再生され蕎麦屋「信州坊主」となっています(安曇野市所有)。



④拾ヶ堰サイフォン

サイフォンとは、引いてきた奈良井川の水を梓川の下をくぐらせ安曇野に引き入れる施設です。それまでは牛杵や蛇籠などを使って水路を平面交差させていましたが、大正9年(1920)に川底にコンクリート管を埋設する大工事を行いました。展示されているのは、平成10年(1898)に改修したときの掘削機のドリルです。



⑤飯田砦跡 ※安曇野市史跡

戦国時代、信濃に侵攻してきた武田軍が前線基地として造ったとされる砦跡です。土塁や空堀の遺構がよく残り、「つわものどもが夢のあと」の雰囲気を感じることができます。この周辺にはほかにも真々部氏館・鳥羽館・熊倉館などの中世の城館跡が点在しています。



⑥つくればら観音堂

馬頭観音ばかりが集められている村はずれのお堂です。人馬の休息や、馬をつくろったり、餌をやったりする場所だと伝わっています。



⑦中飯田の屋敷林と本棟造

江戸中期の建築というI邸は、棟に上げた「雀おどし」や正面の格子窓など本棟造の特徴がよく表れ、保存状態も良好です。手入れの行き届いた屋敷林と趣きのある源氏堀とのバランスも良く、古い風情を残しています。遠路を来る人の目印となるように母屋の壁は褐色に塗られ、かつては「赤壁」と呼ばれていました。

安曇野豆知識 p.24



⑧旧酒蔵「飯野屋」(蔵久) ※国登録有形文化財



江戸後期の文化年間(1804～18)創業という酒蔵「飯野屋」で、近年までここで「酔園」を醸造しており、当時の面影が残っています。本棟造の主屋の一部を利用して、現在はかりんとう製造会社が食事処「蔵久」として営業中です。古民家保全の好例といえます。

飯田の道祖神

飯田地区には全部で12基の道祖神があり、そのうち双体像は1基のみです。あとはすべて文字碑で、書体もさまざまです。



a 道祖神
文字碑 文政7年(1824年)



b 道祖神
文字碑 文政5年(1822年)



c 道祖神 文字碑
小さい方は松本市島内の平瀬から道祖神盗みされた「嫁入り道祖神」と伝えられています。

安曇野豆知識 p.27

No.5 堀金・田尻地区

—— 白井吉見のふるさとを訪ねて ——

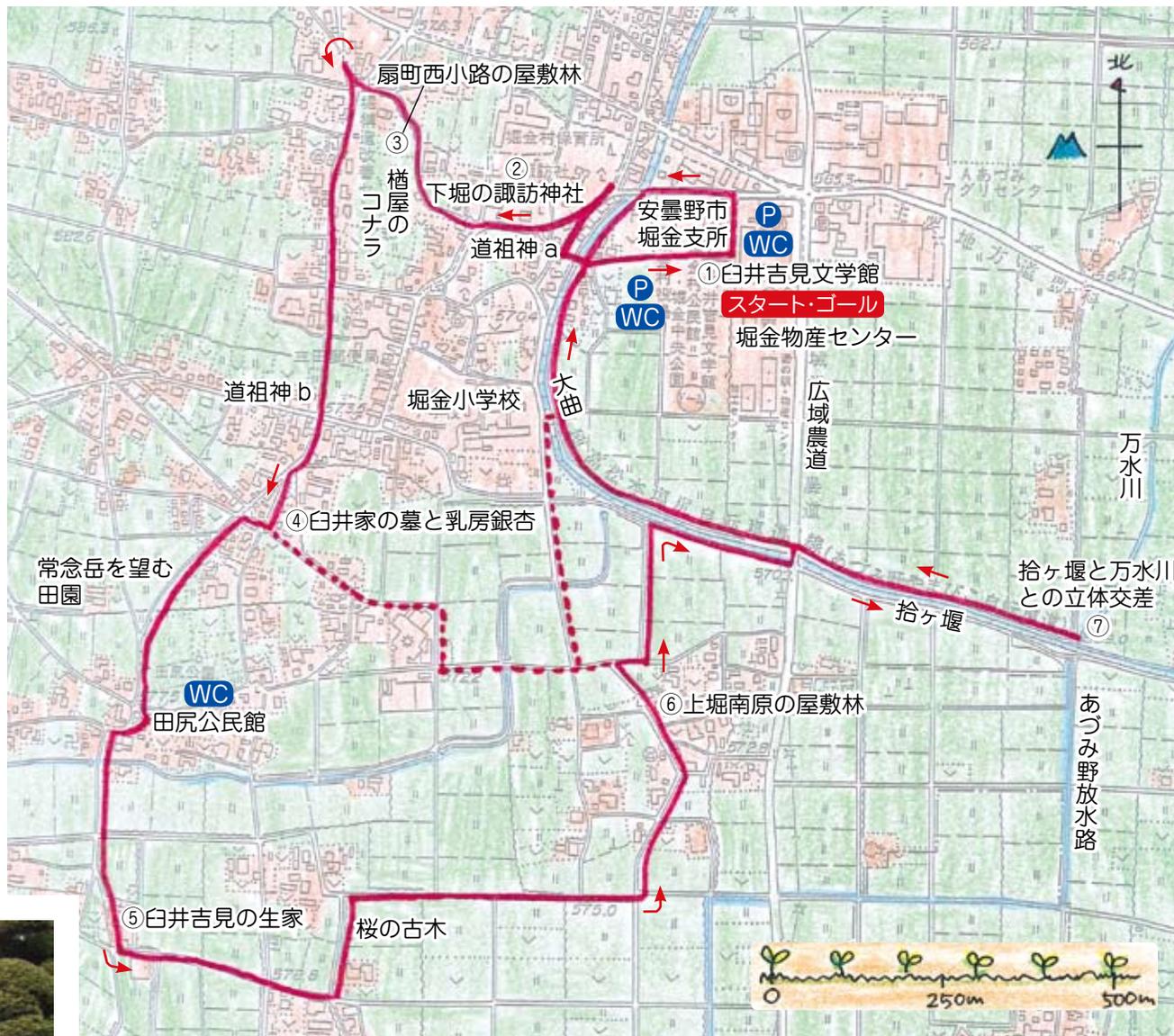
「安曇野」の名を全国に広めた小説『安曇野』の作家・白井吉見のふるさとをたどるコースです。常念岳を望む田園風景の中に点在する道祖神が、静かに歴史を語りかけ、本棟造の主屋と屋敷林がみごとに調和した集落が展開しています。万水川との立体交差から大曲へと、先人の文化遺産である拾ヶ堰がゆったりと流れ、安曇野の歴史と文化の魅力にあふれた地域です。



白井吉見の生家



扇町西小路の屋敷林

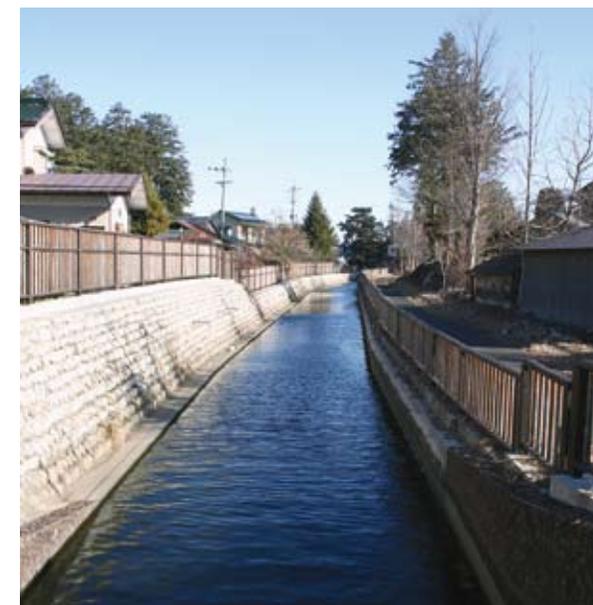


◆コースタイム ※時間は歩速 3km / 毎時としての目安です (休憩含まず)。

スタート 白井吉見文学館→約 0.3km * 10 分→下堀の諏訪神社→約 0.5km * 10 分→扇町西小路の屋敷林→約 0.7km * 15 分→白井家の墓→約 0.8km * 15 分→白井吉見の生家→約 1.2km * 25 分→上堀南原の屋敷林→約 0.9km * 20 分→拾ヶ堰と万水川との立体交差 (万水川起点) →約 1.4km * 25 分→ゴール 白井吉見文学館 【合計】 約 5.8km * 2 時間



拾ヶ堰と常念岳



拾ヶ堰



上堀南原の屋敷林



ぬかくど

①白井吉見文学館

編集者・評論家・小説家として活躍した堀金出身の白井吉見の文学館です。小説『安曇野』『獅子座』の生原稿をはじめ、数々の文献や愛用の品々、写真などが展示されています。

◆開館時間：9：00～17：00 入館料：大人 300円・小人 150円 月曜定休



②下堀の諏訪神社

広い敷地に建御名方命（諏訪神）・事代主命（出雲神）・菅田別命（八幡神）をまつっています。本殿は岩原出身の宮大工・浅川豊八の子、浅川政吉の作品であるとされ、境内の中央には千度石があります。



③扇町西小路の屋敷林

小路沿いに屋敷林が点在し、旧県天然記念物の「榎屋のコナラ」の切り株も残っています。広大な屋敷林に囲まれたY邸の座敷は堀金の寺の庫裏を移築したもので、玄関には樹齢300年というクロマツが門かぶりとなっています。

☞安曇野豆知識 p.24



Y邸の屋敷林



榎屋のコナラ

④白井家の墓と乳房銀杏

古い千国道沿いにある白井一族の墓地に、白井吉見の墓もあります。ここには幹が乳房のように垂れ下がる「乳房銀杏」や、旧阿弥陀堂の持仏堂があります。



⑤白井吉見の生家

農家の二男として生まれた白井吉見（1905～87）の生家です。田尻集落にある西向きの本棟造の家で、吉見少年は毎日常念岳を望みながら小学校に通ったといひます（非公開）。



⑥上堀南原の屋敷林

A邸の正面の門は明治時代に松本城の旧城門を購入して移築したといい、瓦には藩主戸田家の家紋が見えます（「松本城大手門」として安曇野市有形文化財）。屋敷林は以前に比べて三分の一程度となったようですが、本棟造の主屋と門、屋敷林の調和がみごとです。

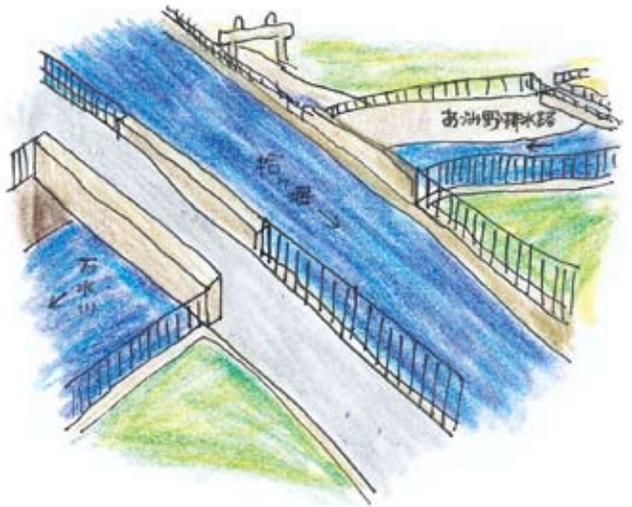
☞安曇野豆知識 p.24



⑦拾ヶ堰と万水川との立体交差

東西に流れる拾ヶ堰の排水路として、ここから北に万水川が始まる場所です。上流に完成したあづみ野排水路を万水川につなげたことで立体交差となり、独特な景観をつくり出しています。

☞安曇野豆知識 p.25



田尻の道祖神



a 道祖神
文字碑 文政10年（1827）
二十三夜供養塔、念仏供養塔、花崗岩の自然石、庚申塔と一緒に基壇に並んでいます。



b 道祖神
酒器像 明治12年（1879）
男神は衣冠束帯、女神は十二単の姿です。

☞安曇野豆知識 p.26

安曇野豆知識

屋敷林

屋敷林は北アルプスの景観や田園風景とともに、自然と人々が育んできた安曇野の貴重な財産です。屋敷林はかつては家屋を守る防風林であり、また生活のための建材や燃料などに幅広く利用されてきました。主に北西側に常緑樹、南東側に落葉する広葉樹が配置され、安曇野の重要な景観要素となっています。



安曇野には2,000～3,000か所の屋敷林があるといわれていますが、近年は生活との関わりが薄れ、周辺の宅地化や所有者の高齢化などによって急速に失われつつあります。2008年5月には「屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト」が設立され、2009年11月には「屋敷林サミット」が開催されるなど、市民主体の保全活動が広がりつつあります。

本棟造

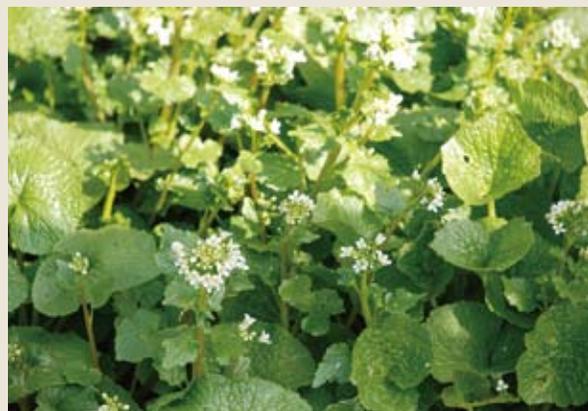


本棟造は、長野県の中信地方から南信地方にかけて分布する民家の形式です。平面は8間～10間四方の正方形で、正面に勾配の緩い切妻屋根の小口を見せるのが特徴です。棟に上げた「雀おどし」や格子窓を意匠としています。17世紀ころから庄屋や本陣クラスの上級農民の住居形式として成立し、重要文化財に指定されている安曇野市の曾根原家住宅、松本市の馬場家住宅、塩尻市の堀内家住宅などが有名です。

わさび田

栽培植物のワサビには水の中で育てる水ワサビ（沢ワサビ）と、畑で育てる畑ワサビ（陸ワサビ）があり、安曇野は全国有数の水ワサビの産地です。3月から5月に可憐な白い花を咲かせ、安曇野市の市の花にも指定されています。

犀川・穂高川・高瀬川が合流する三川合流部周辺は豊かな湧水に恵まれ、大王わさび農場をはじめ多くのわさび田が点在しています。湧水は真夏でも水温が15度を超えることはなく、日量70万トともいわれる豊富な湧水は水ワサビの栽培に最適で、排水はニジマス養殖などにも再利用されています。清らかな湧水と幾何学模様をなすわさび田、そしてわ



さび田の掘削残土でできた築山に茂るニセアカシアの林は、安曇野らしい独特な景観をなしています。



三角島

年間約200万人が訪れるという大王わさび農場には、蓼川と万水川に面して、かつて黒澤明監督が「夢」の撮影に使った水車小屋があります。三角島はこの水車小屋の対岸にある、川に囲まれた三角形の中洲のような場所です。ヤナギ・クルミ・ハンノキなど水辺に育つ植物が自生し、湧水や貴重な動植物など手つかずの自然が残され、かつては子供たちの遊び場でした。

近年は万水川の治水工事による自然破壊が懸念されていましたが、2009年3月に「三角島ふるさとの森プロジェクト」が立ち上がり、県や市の協力も得て市民主体の保全活動が始まっています。



拾ヶ堰

拾ヶ堰は江戸時代後期の文化13年（1816）に、安曇野の10か村の農民たちが手掘りで築いた農業用水です。安曇野の扇状地の中央部は地下に水が浸透してしまい、なかなか水田を開くことができませんでした。江戸時代に入って矢原堰・新田堰・勘左衛門堰など、犀川の水を等高線に沿って遠くから引いてくる「横堰」が開削されるようになり、最後に大規模な拾ヶ堰が開かれて、安曇野はようやく今のよう米どころとなったのです。

拾ヶ堰の全長は15kmありますが、始めと終わりで5kmしか高低差がありません。これは標高570mの等高線にほぼ沿って掘られたため、これにより安曇野の中央部に300haの水田ができました。奈良井川から引いた水は途中にある梓川の下を横断して流れ、現在は約1,000haの田を灌漑しています。



てんさん 天蚕



安曇野は200年以上の歴史を持つ「天蚕」の里です。室内で飼うカイコ（家蚕）が桑の葉で飼育されるのに対し、外で飼う天蚕（野蚕）はクヌギやナラの葉で飼育し、ヤマコやヤママイとも呼ばれています。天蚕の繭からとれる天蚕糸はつやのある光沢としなやかさが特徴で、「繊維のダイヤモンド」「繊維の女王」と例えられるほどです。

最盛期には3,000%を超えていた天蚕飼育も、戦争で一時飼育が途絶えてしまい、その後旧穂高町のはたらきかけで復活しました。現在の飼育農家は穂高有明地区の数件のみで、天蚕糸からできた織物は京都でも最高級の評価を受けています。天蚕の幼虫は透き通った緑色で、6月下旬ごろに最も大きくなります。

どうぞしん 道祖神

道祖神とは、ムラの入口や辻などの道端にまつられ、疫病神がムラに入ってくるのを塞ぎ止める神と考えられ、「塞の神」とも呼ばれます。同時に五穀豊穡・無病息災・子孫繁栄などをかなえてくれる神ともされます。道祖神碑にはおもに文字碑と双体像があり、男女二神を表わす双体像は、男女が肩を組

み手を取り合う握手像、男神が盃、女神が瓢を持つ酒器像、男神が笏、女神が扇を持つ笏扇像などがあります。像の周りには神殿や松竹梅・菊の花



弁などが彫られ、中には彩色されたものもあります。道祖神は古くは藁人形や木像であったと考えられ、陰陽石などの性信仰とも融合したものと思われていますが、江戸時代に入って石でつくられるようになりました。安曇野に数多くの道祖神があるのは、小さな集落ごとに道祖神信仰が厚かったこと、素材となる花崗岩が豊富だったこと、腕の良い石工が千国道を往来していたことなどが理由として考えられています。

こうしんとう 庚申塔

庚申塔とは、中国から伝来した庚申信仰の石塔で、多くは60年に一度の庚申の年に建てられました。60日ごとにめぐってくる庚申の日の夜は、人のお腹の中にある「三戸の虫」が、夜に人々が寝静まってから体から抜けだし、その人の悪事を天帝（宇宙を支配する神）に告げにいくといわれます。その夜は愛欲・貪欲を慎み、善行をしなければなら



ないとされ、夜を徹して庚申様（おこしんさま）に祈り語らう風習がありました。「話は庚申の晩に」という言葉があるように、一種のレクリエーションの意味もあったのです。また、農村社会においては冠婚葬祭や家屋新築などを取りしきる「庚申仲間」が、相互扶助の大きな役割を果たしており、今日でも形を変えながら地域で受け継がれています。

にじゅうさんやとう 二十三夜塔

二十三夜塔とは、月を信仰の対象とし、二十三夜の晩には飲食を共にしながら夜明け近くの月の出を寝ずに待つ「二十三夜講」の講員（おもに女性）が、供養のために建てた石塔です。十三夜は虚空蔵菩薩、十五夜は大日如来、十七夜から二十二夜までは観音菩薩、二十三夜は勢至菩薩を本尊として崇拜の



対象としていましたが、月は勢至菩薩の化身であると信じられていたことから、二十三夜講が最も一般的です。安曇野では道祖神の横に、文字碑や勢至菩薩像の大きな石塔が並んで立っているのをよく見かけます。

ばとうかんのん 馬頭観音

馬頭観音は、仏教の信仰対象である観音菩薩の化身の一つで、六観音の一尊にも数えられています。近世以降は、馬の供養のために石碑を建てられることが多くなり、頭上に馬の化仏が彫られている観音像や文字碑など



があります。なかには馬の名前を刻んだものもあり、馬も家族の一員として手厚く供養されたことが分かります。

ぬかくど

ぬかくどは昭和20～30年代に安曇野などで活躍した、ダルマストーブのような形をした炊飯道具です。「ぬか」とは籾殻、「くど」はカマドのことで、ぬかを燃料とした炊飯専用のカマドが「ぬかくど」です。燃料のぬかはあり余るほどあり、灰は肥料となります。薪を利用するカマドのようにつきっきりで火加減する必要もなく、自然と「始めチョロチョロ、中パツパ」でおいしいご飯が炊けるようになっています。まさにエコロジーの面では革命的な道具であり、最近では環境に優しい道具として見直されています。



—— NPO 法人信州ふるさとづくり応援団 ——

信州ふるさとづくり応援団は、Iターン者と地域住民との交流による新しいふるさとづくりをめざして2006年2月に設立され、同年6月に長野県からNPO法人の認証を受けました。応援団という名のとおり、地域で活動する市民活動団体や行政などとの協働を重視し、安曇野市に本部、安曇野・東信（佐久）・上田に支部を置いて、各支部を主体に活動しています。

安曇野支部ではIターン者と地域住民が交流を深め、地域の自然・文化・風土を大切にしたふるさとづくりに取り組んでいます。そして、私たちの活動に賛同し、「ふるさとウォッチング」などへの参加を通して活動を支援していただく「ふるさとパートナー」を募集しています。年会費は1,000円で、登録会員数は94名（2010年2月末現在）です。私たちと一緒に活動してみませんか。詳しくは安曇野支部ホームページをご覧ください。http://npo-furusato.way-nifty.com/azumino/

《ふるさとウォッチングマップ第1集》

制作スタッフ：木船潤一 小林誠 佐伯治海 鈴木研一 高松伸幸 田村恵子 等々力秀和 場々洋介
（50音順） 宮崎崇徳 宗像章 望月彰 渡辺晃
協力：市民タイムス 安曇野ブランドデザイン会議

参考文献：『道祖神が道案内 安曇野みちくさの旅』（安曇野市観光協会）、石田益雄『道祖神をたずねて一穂高一』
『道祖神をたずねて一豊科・堀金一』（出版・安曇野）、『安曇野の拾ヶ堰 ガイドブック』（長野県拾ヶ堰土地改良区・拾ヶ堰応援隊）

※各地区のルート図は安曇野市都市計画図（1万分の1）をベースに作成しました。